せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇二号（一日発行）
平成十年三月一日

年表で読む古平の歴史

《9》

■ビクニとフルヒラの境界争い

場所請負のころから、隣の余市と美国との境界ははっきりしていませんでした。なんとなく、前から住んでいたアイヌの人たちの言うままになっていましたが、安政四年（一八五七）に、松浦武四郎が領分境を書いてからこれで決まったと思われていましたが、フルヒラとビクニはその後も境界争いを続けていたようです。

■老中の家臣が調べた当時のフルヒラ

蝦夷地のことが大きな問題になると、幕府でもその状況を知るために家臣をつかわして調査を始めました。老中阿部伊勢守の家臣であった石川和介は安政三年に西蝦夷地（日本海側）をまわって、古平にも泊っています。

「（四月）シャコタンを出発して古平に泊る。行程五里半余、（省略）ホロキシナイというところがあって、ここがヒクニとフルヒラの境となっている。五、六丁（五五〜六六〇メートル）行くとヒロカルウシというところがあって、そこには漁場や番屋がある。その右に大きな岬があり、その形が丸いことから丸山岬と名付けられている。頂上にはのろし台があり、ヒクニ、ヨイチにも同じのろし台があり、もし何かことがあれば互いに合図して警報し、船乗りはこの岬を目印にするのだという。

その岬　のつけ根を回り、再び海に出る。それよりトマリ、メメタラエ、チョベタンを過ぎフルヒラ運上屋に着く。

四月二十六日、古平を出立、高島に止宿

フルヒラ川、メナシトマリ、ラルマキ、セタカモイを通ったが、丸山岬と結ぶ内側は湾になっていて港である。ここまではみな漁場で漁の盛んなところである。

セタカムイ岬の辺りは削ったような険しい崖が続いていて、まるで屏風（びようぶ）を立てたようである。セタカムイ岬を回るとユンナイで、この岬を回るとフルヒラとヨイチの境で、チャラツナイという漁場があるが、ここの沖にはろうそく岩という高さ三丈ほどの岩が立っている。」

またこの辺りの家では、屋根にクマザサをふいているとも書いている。

■古平運上屋のこと

安政六年（一八五九）、秋田藩士が樺太へ警備に出かけたときの道中の記録を、文久三年（一八六三）にまとめたものがありますが、その中に古平と運上屋のことを書いています。

「…古平へ着くが澗が広く、大船が数知れず入っていて、波が静かで湖のようである。運上屋へ上がるが座敷が広く、廊下も三間幅で両側に座敷がある。その外側には樫板の回り縁があり、よく磨かれていて鏡のようである。板蔵が八戸建っているが、雑小屋は数知れず。右の方二丁ほど先に川があり、川を隔てて御役宅があるが、門構えもよく、広大にして立派である。蔵も五戸見える。そのほか人家が百七十軒あるという。」

短歌

古平岬短歌会詠草

電柱に止まれるカラス雪空にわが婆を見おろすシモフリ模様して　長崎フユ

センターの鉢に可憐に咲きつぐはブーゲンビリァとぞ聞きて知りたり　池田テル

真冬日の差す窓にあたり綿雪のとけてゆっくり消えゆくが見ゆ　竹内コト

オリンピックの大観衆の中土俵入りの横綱曙堂々と終へぬ　榊佳代

山荘に今は在さぬ師の君を偲びて百余の石段を見上ぐ　菅原節子

柴をさす標をたどり雪道を回覧板持ち隣り家を訪ふ　東美知

声張りて豆撒きをする子を見るに夫の仕草に似て来たるなり　堀典子

知らず知らず気合こめてのカルタ会脳活性化につながりてをらむ　鈴木時子

ガラス戸の氷紋真白く外(と)は見えず凍れ厳しき立春の朝　田中香苗

風邪(かざ)声の妹二人老い母を元気かと気遣ひ電話をくるる　丹後初江

活きのよき助宗さけば紅き子のずしり重し手にとり出しぬ　金杉すみ

除雪車のバックの警報遠く聞こゆ朝まだ暗き冷えしるき中　山口スヱ

八十路迎へ益々生気深まれる貴女の真髄近づきがたし　魚屋友子

童髪なる縮緬の木目込みを大人の雛(ひいな)とあるじ勧めぬ　堀昭子

雪との生活と春を迎える漁場

波辺ハツエ

暖かいと言われた今年の冬も正月に入ってから例年通り雪が降り、私も元気に雪掻きの出来る幸に感謝しながら、この冬を過ごすことが出来ました。

文明の利器と言われる除雪車と排雪車の活躍はすばらしく、それに乗っている運転手さんのご苦労もはかり知れません。大雪の日には、早朝から力強い除雪車のエンジンの音で目が覚めます。

昔のことを思い出すと、大雪が降ると家の廻りの雪を踏み固めることと、ジョンバで積み上げるより方法がなかったし、除雪用具もスコップ、ジョンバとかんじきがあるだけでした。当時の木のみかん箱が、ジョンバを作るのに大変重宝しました。出来上がったジョンバにはローを塗って、雪が着かないように工夫していました。またかんじきは、雪国の暮らしの必需品として優れものです。私はいまでも愛用していますが、こんな便利なものを考案した先人たちの知恵には敬服しています。

昔から新地町は軒並み商店街で、また古平の繁華街でした。向かい合った商店ではそれぞれ道路に雪を積み上げて、入口のところだけ通路を開けていました。

思い出される鰊場の全盛時代の二月は、まず網元の場所の雪投げから始まります。主に南部方面からの、何百人もの若い衆が出稼ぎに来ていました。私の知る限りでは入船町には十戸ほどの網元がおりましたが、その親方衆はお互いに権勢を競っていて、着流しに懐手の親方には威厳があって、ちょっと近寄り難い存在でした。

雪投げは山そりに雪を積ん海に近い浜から始め、干場や親方の家の周りなど数日で作業が終わります。雪投げの作業中に若い娘さんでもそこを通ろうものなら、若い衆はやんやと奇声を上げて娘さんをからかい楽しそうでした。次の仕事は倉庫からサンバ船を出すことです。

雪が早く解けて土が顔を出すと、そこは子どもたちにとって格好の遊び場になります。ひと足先に春が来たようで、元気な子どもたちの騒ぎ回る声で鰊場の春が開けるのです。

× × × × ×

「おーい、ここにイタチの足跡があるぞー」

仲間に呼びかけては、とらばさみを何か所かに仕掛けます。遠くまで駆けずり廻って、それはそれは一生懸命でした。

たまに捕れると仲間同士で大喜びしていました。捕ったイタチは自分たちで皮を剥ぎ、ないしょで買ってくれるところがあったらしく、それが小遣いにもなっていたようでした。

昔でもめったに人の目にふれなかったイタチですが、今でもいるんでしょうかねェ。

わなを仕掛けてイタチ捕り

竹内コト

いまではまったく聞かれませんが、寒くなるころから、子どもたちは『とらばさみ』というのをよく仕掛けたものです。『とらばさみ』というのは、良い毛皮がとれるイタチを捕る道具のことです。

私の兄たちも、雪の降り始めるころになるとじっとしてはいません。荒れた建物とか、人気のないような小屋、古い木の根の辺り廻りなど、イタチの住んでいそうなところや、その通り道にとらばさみを仕掛けに行きます。雪が降ったりするとイタチの足跡が残っているので、そ

―稲倉石の思い出―

覚えていますか 可愛い小人たちの踊り ⑦

富山市 高橋 藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

「せたかむい」九十八号で本間さんが「昭和四十三年は、開町百年に当り、旗行列などの祝賀行事が賑やかに行われ…」と回顧されておりました。

稲倉石の私たちには、町で行っているスポーツ大会・花火大会・のど自慢大会など全町挙げての記念行事の模様が、四・五日遅れて伝わったものでした。

ところが、九月四日に「九月八日、町民仮装行列を行うので各町内必ず参加する事」との回覧が回ってきたのです。

参加するにしても、準備期間が五・六・七日の三日間しかなく、それに九月九日は、稲倉石の住民大運動会で、その準備の真只中という慌ただしい最中の時期でした。

早速、お祭り好きのアイデアマンが集まり、辞退しようとの意見も出たのですが、そこは義理堅い鉱山気質が許さず

「町の要請に応えるのが町民の としての義務。参加するのは 当たり前の事」

という事になったのです。

演し物の候補もあれこれ出たのですが、あと三日間では造作や衣装をつくる暇もなく

「衣装を作らずに簡単にやれる 物はないか」

「うーん、まさか普段着や作業 服では出られまいし」

「でも、裸じゃまずかろう」

「衣装もダメ、普段着もダメなら裸しかなかろう」

「じゃあ、お前の十八番の腹踊りはどうじゃ」

「そうだ。腹踊りなら衣装もいらんし」

「稲倉石の演し物が腹踊りでは 下品すぎないか」

「じゃあ、お姫様と一緒に踊らせ、マンガン姫と七人の小人たち、としたらどうか」

という事に一決した。

あっという間に過ぎ去った四日後の九月八日。私たち裸族にとっては最悪の小雨混じりの肌寒い日となった。

半ズボンだけの裸族は、お腹一面を汗知らずで白く塗り小人の顔を描いたのですが、中央にあるオヘソの凹っこみが見苦しい存在となり、ピンポン球を糊でくっつけて小人の鼻に変身させ、冷や酒を呑みほし古平町の会場えと車を走らせました。

各町内会や企業などから参加した十数組とともに町内を踊り回ること三時間。

小雨の中を、笛・かね・太鼓のお囃しに乗って七人の小人がお腹をよじらせての踊りを続けましたが、雨と寒さは裸同様の小人たちには大敵でした。

寒さしのぎに冷や酒をあおったものの、飲めば出るの自然の法則には勝てず、小路や物陰での立ションの連発となり、観客の失笑を受けましたが、これは致し方のない現象でした。

小人たちの熱演は、町民を爆笑させ、町長さんも手をたたいて喜んでくれました。

かくして、楽しく〆寒く・疲れ切った一日は終わり、審査の結果は二等賞という望外の入賞で締めくくる事が出来ました。

意気揚々と稲倉石に戻った小人たちは、早速湯に浸り、お腹の化粧を落とし冷え込んだ体を温めたのですが、強力すぎた糊のために、ピンポン球がヘソから離れず皮がむけ血を流したばかりか、全員が下痢と風邪を頂戴すると云うオマケ付きの行事となりました。

でも、翌九日の稲倉石住民大運動会には、鼻水を垂らしながら大奮闘する小人たちの姿がありました。

川柳

北　政道

着工の新トンネルを待ち望む
不況さを見せぬテレビのコマーシャル
手を合わせ介護保険を拝みます
新聞のチラシを見ても金が無し
年金で細々暮らす命の灯

渡辺　ハツエ

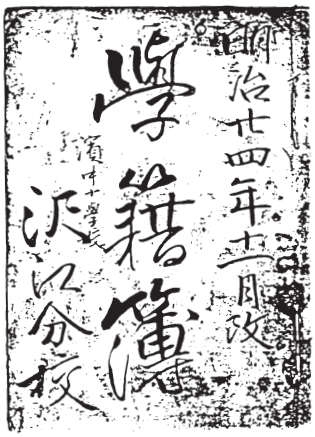
雪掻きが出来る幸今朝も知る
達筆な表札掛けて亡夫逝けり
年毎に孫の賀状はおとなめき

石井　愛子

良くなれと両の手合わす初日の出
一合の酒にほろりと婆の酔い
オリンピック子も放送に関わりて

「古い文書」を読む〈3〉

浜中学校 沢江分校

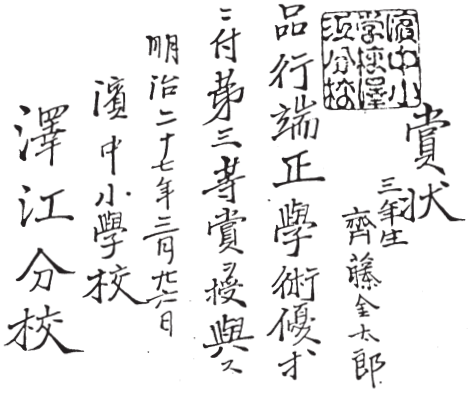


明治十五年、古平川をはさんで浜中学校と向かい合うようにして、民家を借り一教室だけの沢江学校が創立されました。

古い建物であったので同二十一年、一教室に教員の住宅を付けて校舎が新築されましたが、同二十四年、新地・沖の学校と共に浜中学校の分校となりました。

同三十年に生徒数が増えたことから、六坪ほどでしだが増築をし、合わせて修理も行いました。このときの費用は地域の人からの寄付によってまかないました。

当時、古平川の下流には橋がなく渡し舟が往来していましたが、橋を掛けることが決まったことから同三十八年十一月、浜中学校に統合されました。橋は翌年一月に完成し、洪水で流されたりしましたが、昭和六年新しい橋が出来るまでは大事な交通路でした。



遥かなる故郷の思い出

『古平弁』の話

[42]

橘　義春

『方言は国の手形』とか、『方言はその土地の生んだ文化』だと言う人もいる。

古平の方言は、明治時代から越後衆・佐渡衆・能登衆・津軽衆・南部衆などといわれる人たちが北前船で古平へ移住して来たが、それぞれの国の方言がごっちゃになって、いわゆる古平弁が生まれたのではないだろうか。

今は、古平も昔と違って言葉も都会化して、すっかりきれいな言葉になったように思う。

私などが子どものころは、漁師の家の古平弁は特にひどかったような気がする。ズーズー弁で、言葉を簡略化し、おまけに早口でなまる上に、発音が悪いときたもんだ。

「このモズ、タエスタメど、カネガ」

（この餅、とってもうまいぞ、食べないか）

「メがったら、エペエケ」

（うまかったら、たくさん食べなさい）

「どんだ、メグネェガ」

（どうだ、うまくないか）

私が子どものころしゃべくる（しゃべる）言葉は、ざっとこんな調子であった。

今も古平にいる弟は、子どものころの言葉そのまんまで、体は子どものころの何倍もおがった（成長した）が、言葉だけは子どものころとおんなじでなんもおがらネ。

私のように五十年も古平弁を使っていないと、とっさにしゃべれなくなってしまう。相手の言っている古平弁はちゃんと分かるが、さて、自分でしゃべるとなるとなかなか難しい。

発音を古平流に修正しなければならないし、ズーズー弁となまりをいれるとなると、なおさら難しくなってくる。

発音については、若いころに東京に出て大変苦労したが、発音については申し訳ないが、当時の小学校の先生にも責任があったかも知れない。先生方の中にも「イ」を「エ」と発音する先生が大分いた。従って子どもたちも「イ」と「エ」の区別がつかず、みんな「エ」と発音していた。

そのほかに「シ」と「ヒ」、「ス」はどれも「ス」、また「チ」と「ツ」もみんな「ツ」と発音していた。

この発音について熱心に指導していただいたのが、音楽担当の中川幸一先生であった。何しろ子どもたちは生まれたときから「エ」「ス」「ツ」で用がたりていて、それに慣れていたので覚えるのも大変であった。なかなか「シ・ス・ヒ・イ・エ・チ・ツ」の使い分けが出来なくて困っていたら、中川先生がみんなに『寿し屋の歌』というのを教えてくれた。

「スシ屋の　ススはき
スシ桶へ　ススが落ちて
スシがススで　ススだらけ」

という歌であったが、これは簡単なようでなかなかうまく歌えなかった。最初の出だしから「ススヤ」になってしまって、先生をさんざんてこずらしてしまった。

唱歌の時間が終わり学校からの帰り道、港町の〈おとこ石〉〈おんな石〉のある通りを、友達と『すし屋の歌』を大声で歌い、ケラケラ笑いながら帰った思い出がある。

お礼

♣田中勇夫さん
・共同大謀帳簿類　三冊
・昭和27年北海道年鑑　一冊

♣岩崎隆一さん
・刀剣の鍔（つば）　一個

♣岩崎クニさん
・古平中学校
卒業記念アルバム　一冊

ご寄贈いただきまして、どうもありがとうございます。

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を眺める

【2】

大正十一年

1／16　信用組合楼上で一時から部落会総会、のち署長の訓辞あり、五時から余興と浪花節があった、大勢集まった

1／30　農友会役員会、後三時から平田宅

1／31　家の前の雪投げの馬車出面、八日分で二十四円支払う（一日三円）

2／6　部落会役員会、夜、平田宅へ行く

2／12　新地、丸山方面昨日からの雨で洪水、前四時半、消防団や青年団が出る

2／13　禅源寺花まわり晴れ間もあり大勢の人で賑やかであった

2／14　禅源寺で禅学会の会合あり、後一時から説教師の説教あり

2／15　農会役員会、後一時役場、真崎技術員の件であった

2／17　夜五時から学芸会、運動場も満員であった、十一時帰る、変わった面白い劇をやるようになった。明日は夜、新地座である

2／20　農会総会、後一時、作柄が良ければ品評会をやるとのこと

2／24　漁夫が続々と入り込む昨日福山方面から五十人から六十人が発動機船、汽船で来る、漁場気分になってきた

3／4　小樽税務署から営業調査員が吉井旅館に来た、出頭せよとのことで行く、税額で折り合いがつかず帰る、八時

3／5　小売り三万円として営業税を決めてきた、夜、部落会の月並会へ行く

3／15　電話がついた、百十二番、市内だけでまだ地方とは通話できない、十七日から地方への電話も通じるという

4／6　鰊大漁、刺網がよい、学校も三日間休みになる

4／15　朝方から急に暴風、時化てきて浜では大騒ぎになる漁夫一人が溺死、鰊を投げたところが多い

4／20　その後鰊漁なし、タラ漁が近年になく大漁である

4／25　鰊漁がなく、刺網の人は網洗いをしている、身欠き一本二千円位、高値である、歩方は漁がなく気の毒である

4／29　夜、沢江北斗団の火防宣伝びらが廻ってきた

4／30　鰊製品の値段がよいのでこれで埋め合わせがつくだろう、タラ大漁、一日四十から五十束とれる、一束四円五十銭

5／11　浜町郵便局が開業式を行う、日の丸の旗を立てる、小さいがきれいな局である、困が局長

5／17　本陣の浜に小樽から大はしけ二隻がボートに曳かれて来た、学校新築の用材である

5／21　学校敷地の地ならしを馬車十四、五台でやっている用材も運搬している

5／24　町の自治問題に関して町民大会、後六時から十時古盛座、鉄道敷設、学校問題について批判

5／28　㋑公園の別荘の建前をやっている

5／31　町会議員選挙、一級と二級別の選挙

6／6　りんごの害虫駆除について協議会、前八時役場、二十余名が集まる

6／21　三山神社宵宮祭、手踊りがあるというのでたいそうな人出てある、

6／22　後一時ころ神輿が通る手伝い人夫、旗持ち、子ども少しで閑散として寂しい、夜踊りがあって賑やかである

6／25　電気会社開業披露祝宴あり、招待客も多数

7／10　皇太子殿下が小樽に行啓になり、共栄丸で小樽へ直行する、百人以上が乗っている、富丸も満員で出る、午後六時十二分小樽駅着の汽車で来られる、古平方面から千人以上も行っていた、

（以下次号）

古平の方言 (13)

・べろ＝よだれ、ぬるぬるしているもの
「べろカンジカ（カジカ）釣った」
・べろすけ＝すっかり、全部
「（勝負事などで）やァやァ、あいつにべろすけやられでしまった」
・べんちゃら＝おせじ、調子を合わせる
・べんふり＝へつらう、おべっかを言う、おせじを言う
・ほいど＝もの乞い、いやしい、欲ばり
・ぼうずみがき（身欠き）＝はねもの（規格はずれ）の身欠き、品質の悪い身欠き
・ぼっぽ＝（子どもの）着物
・ほどく＝結んだものや、からみ合ったものを解く
・ほまじ（ほまち＝帆待ち）＝へそくり、ごまかした余得、（べごという人もいる）
・ぼんくら＝ボウーとしている、頭がまわらない、動作が鈍い
・ほんじゃァ＝それでは
・ほんずねェ＝まともでない、ぼんやりしている、つかまえどころがない
・ほんずけねェ＝気が確かでない、性根がすわってない
・ほんだべ＝そうだろう
・ほんだほんだ＝そうだそうだ、その通りだ
・ポンたも＝小さいたも（網）、ポンは、アイヌ語の小さいという意味から転化したものではなかろうか
・ほんとこ＝本気、真剣勝負
「（勝負事で）これほんとこだどォ」
・まいだま＝（正月の飾り）繭だま
・まがだしねェ＝採算がとれない
「こんなに漁ネバ まがだしねェ」
・まき＝一族、親戚や遠戚などのつながり
・まがなう＝支度する、間に合わせる
・マキリ、まぎり＝アイヌ語の小刀、家庭用の刃物もマキリということがある、カムチャッカマキリ（まぎり）

あとがき

▼すこし前まで、テレビや新聞などでやたらと謝罪シーンが報道されていましたが、このところこの欄でもお詫び続きです。一〇一号では遅れたばかりか、渡辺さんのところへ竹内さんの文章を五行にわたって入れてしまい、途中で意味の通じない文章にしてしまいました。判読してくださった方もあったようですが申し訳ありませんでした。『急いてはことを仕損じる』こんなことわざもありました。

▼また、発行がすっかり遅れてしまって、ご愛読をいただいている方には大変ご迷惑をおかけしましたが、次号からは大いに挽回に努めますのでよろしくお願いいたします。

▼なにかの行事を機会に、古い写真の展示を計画していますので、昔の写真をお持ちの方はお貸し下さい。写真はすぐにお返しします。

水ぬるむ候となりましたが季節の変わり目、いっそうご健勝でお過ごしください。